

# 北陸センター所長賞 受賞

作品名：

「夏の暑い日に白い雲を見ながら思うこと」



金沢大学人間社会学域  
学校教育学類附属中学校  
1年 二見 日向子 さん

## ▽受賞のコメント

小学校での授業を通じて、世界の問題に関心を持つようになりました。見聞きしながら気になったニュースについて調べながら、この作品を書き上げました。

## ▽作品本文

私達は、既に世界とつながって久しい。

綿花が中央アジアで作られ、また別の国で加工され製品となった靴下に、私の足は毎朝収まる。スーパーに並ぶ食材にしてもそうだ。よく注意して見ると、日本ほど世界中の品々に囲まれている国はないのではないかと思う。

世界中から、日本の私達の生活を豊かにするために集められた品々なのだろう。

綿花を育てる為に、灌漑事業や、治水事業が必要だろうし、少しでも効率的に生産を増やすために農業指導も必要だろう。想像するに、それだけではまだ私達の元に届かない。集積され、運ばれ、工場にて加工され、梱包され、店頭に並びそれを母が手に取ってお金を払い、はじめて次の日私が履くことができる。治水や、農業指導等の分野、産業としての物品加工業等において、私達は優れているのだと思う。その国へ、やり方を伝え、共に協力し産業として育つ準備をする。

その土地の生活そのものにも、日本の研究や技術が落とし込まれ、より現地が求める豊かさへの道のりを共に歩む事が国際協力という姿なのだと思う。

素晴らしいことだと思う。そして日本にしか出来ないことでもあると思う。ただ、私は少し胸にチクリと引っかかる部分がある。

アラル海のニュースを目にして以来、「求めすぎ、応えすぎ」が気になっている。アラル海の水を用いて、灌漑を行い農作物の生産量向上を目指した。その結果、巨大な湖が姿を消した。農産物生産量の向上という要求へ応えた結果、何も残らなかったという話だ。

私達と海外の国との協力はこういう場合にこそ必要とされるものだと考える。アラル海の話は一つの例だが、灌漑だけではなく、降水量の問題もあつただろうし、土自体の保水力の点でも十分でなかったのだろう。では、何をどうすればいいのか。日本だったらどのような協力が出来るのか？

私は「和をもって尊しとなす」だと思っている。気象について、農業生産について、土木技術について、それぞれ専門家が必要だと思う。また、その専門家が揃うのも私達の優れている点だと考える。ただ、現地のことに関しては現地が専門家である。チームで難題に取り組み、一緒になって解決を目指す。「和風」の和ではなく「親和・調和・平和」の和だと思う。

現地には何がもたらされ、日本には何が生まれるのか。「求めすぎ、応えすぎ」に対してしっかり考え、チームで取り組む事が、これから求められる協力の姿だと思う。

既に、他国の友人とネット上で集まり話す事が出来る時代だ。画面を通しての協力ではなく、「和」を形にする。とても難しい事だと思う。私も将来メンバーとして、取組みたい事の大きなテーマだと考えている。この仕組みを世界中の多くの人が目にして、それこそ「和風」と呼んでくれたら私は嬉しい。